

聞き取りのメカニズム

——中級聴解練習のためのラジオ番組利用について——

坂 本 恵

1. はじめに 中級における聴解

中級の聴解練習について考えるとき、まず、中級で伸ばすべき聞き取りに関する力とは何を指すかを明らかにしなければならないだろう。ごく常識的に言えば、初級教材に付いたテープや、教師によるコントロールされた発話を理解できる程度の初級段階から、ナマの資料、特にマスコミ、講義などの一方的に受ける発話の大意を取る事のできる上級段階への橋渡しをするということになるだろうか。その意味では実際に聞く訓練が行われるのは中級段階といてよく、この時期の指導は重要であろう。もちろん教育の場所が国内か、国外かの違いは大きく、聴解力は国外においても上達しにくいスキルであることは確かである。読解力、表現力においてすぐれた能力を持っても聴解能力に欠ける学習者の例も多い。その意味では、聴解に関しては国内に於ける中級指導法は国外においては上級程度に相当するのかもしれない。ここでは実際に役に立つ聴解能力を養成するためにどのような試みができるかを考えてみたい。目標をテレビ、ラジオ、あるいは講義が聞き取れる程度に置くことにして、中級段階ではどのような指導をしたら良いのだろうか。最近では中級程度の良い聴解教材も開発されているが、実際問題として国内で教育を受けている学生の場合、コントロールされた発話にはすぐ慣れてしまって物足りなくなることが多い。そこでなるべくナマの資料を使いたいと思うわけだが、適当なものはそんなに多くないのが現状であろう。資料を選ぶ際にどんな点を考慮した

ら良いのか。

そのために、まず、実際に聞き取りためにはどのようなメカニズムが働いているか、どのような能力が必要なのか、どのような段階を経て行くのか考えてみたい。ここでは聞き取りのための能力を「聴解力」と呼んでおくこととする。筆者は中級クラス(日本語センター 1989年度 N3 クラス)において週1コマ毎時間ラジオ番組から取った資料などを使って聴解訓練を行った。また、以前、中国で日本語教師の再教育プログラムのなかで聴解訓練を行ったこともある。その経験も考慮に入れながら聴解力の実際とその育成、そのための教材作成について考えてみた。

2. 授業の実際

2.1. 中級クラスでの場合

1989年度 N3 クラスにおいて前期数回、後期は毎週1コマを聴解訓練に当てた。後期使用した教材は次の通りである。

	種別	テーマ	長さ(分/秒/リ)	補助教材の有無
1.	ニュース	台風22号	3'19"64	無
2.	ニュース	消費税代替案	1'29"19	無
3.	トーク	秋を感じるとき	1'41"44	無
4.	トーク	海への思い	2'12"19	無
5.	ニュース解説	株価の乱高下	3'33"25	単語表
6.	解説	日本シリーズ第3戦	1'05"39	無
7.	情報	航空便の発着状況	3'55"69	質問表
8.	ニュース	ベルリン情勢	3'04"51	無
9.	教材	講演会の司会*	1'15"11	質問表
10.	ニュースレポート	小中学生の塾の費用	5'07"55	単語表、質問表
11.	ニュース	米ソ首脳会談での合意	1'36"10	単語表
12.	ドラマ	仙人	8'58"59	質問表
13.	ニュース	首都圏の大雪	14'08"45	無
14.	意見の主張	PTAでの母親の発言	1'40"09	質問表

(*Aural Comprehension Practice In Japanese 16課)

以上の番組をテープに録音し、まず2, 3度聞かせ、全体的な内容を質

問、わからない単語などを説明、少しずつ内容を追う。質問用紙のあるときは書かせ、回収する。その後、細かい部分を聞き取ることができるまで何回も聞かせる。聴解力というのは個人差が大きく、その学生の語彙力とも関係するが、すぐ内容が答えられる学習者とそうでない学習者との差異は大きい。そのため後半は質問表を多用したが、これは聞いて理解したことを表現する力も要求されるので学習者一人一人の総合力を見るのに役立った。そして最後にスクリプトを与え、文字を見ながら内容を確認させるというのが指導の手順である。なお、最終回で用いたのは会議での発言であり、文も整っていないのでそれまでのラジオ番組から取ったものと少し性質の異なるものである。

最初は速いと、拒否反応を示した学生も回を追うにつれ内容が聞き取れるようになってきた。最初にトーク番組を聞かせたときには速いという反応が多かったが、13回目のニュースは記者がレポートする形で同形式であるにもかかわらず、学生はよく内容を追うことができた。もっともこれには学生が内容、情景をよく理解している点も大きいだろうが。また、1度だけ聞かせたドラマは大多数の学生が2度聞いただけで内容をよく理解することができた。一方、9回目の、教材から取ったものは、短時間でほとんどの学生がそのほとんどの言葉を聞き取ることができ、ナマの資料とコントロールされた資料との違いを感じさせられた。

2.2. 海外での上級の場合

86年、87年に在中国日本学研究中心において担当した授業のなかで、同じようなニュース、12、14の資料を使用した。この場合の受講生は日本語教師であり、その他の日本語力はかなり高いにもかかわらず、聴解力は先に述べた中級の学生と同じ程度、あるいは、いやむしろそれ以下であったと言わねばならない。中級の学生はドラマの結論をほとんど理解したが、この受講生は半分程度の者しか理解できなかった。また、教材からの資料も中級の学生以上に聞き取りに困難が感じられるようであった。耳から入る情報量にかなりの差があるのは事実である。

2.3. 資料の実際

1. ニュース〈台風22号〉1989年9月19日録音 午後7時 NHK ニュース

はじめに、中型の台風22号は四国の足摺岬の南の海上を東北東に進んでおり、今夜から明日の朝にかけて紀伊半島、東海地方、関東地方のそれぞれ南岸沿いを進む見込みです。気象庁の観測によりますと、台風22号は今日午後1時半ごろ鹿児島県の大隅半島の南部に上陸した後、再び海上に出て速度をやや早めながら九州の東側の沖を進み、午後6時には四国の足摺岬の南およそ70キロの海上にあって、1時間におよそ55キロの速さで東北東に進んでいます。(以下略)

4. トーク〈海への思い〉同10月10日録音 6時20分 TBS ラジオ

(司会者)昨日お聞きにならなかった方に、(ちょっとまたあの)物議を醸すといけないうで断わっておきますけど、(なんかあの)しゃべり方が非常に(あの)気安くしゃべってますが、実は(あの)高校時代からの同級生ということで、おい、お前、おれとやってますんで、どうぞ(あの)お気になさらないで、(ひとつあの)聞いて頂きたいと思います。(略)

(ゲスト)うん、中学の2年だからね、14歳のときに(あの)材木屋さんから材木買ってきてね、手作りの船を作ったの。これが大成功しちゃったのが(あの)病み付きのきっかけだな。(以下略)

9. ニュースレポート〈小中学生の塾の費用〉(部分)同11月28日録音

そうですね。(まあまあ)今回の調査結果をまとめてみますと、(え)、小学生では週2.8日塾に通ってしまして、(え)その年間の費用というのは月謝いわゆる月謝とか交通費、それと模擬テストの費用なども含めますと、26万731円ということになります。(え)また、中学生では週3.1日塾に通ってしまして、年間の費用が30万50円。(え)、この小中学生合わせた全体で28万円余りということになります。

質問表

- 1, 内容を短くまとめなさい。
- 2, 小学生, 中学生は1週間に何日くらい学習塾に通っていますか。
- 3, 26万731円という費用には何が含まれていますか。(以下略)

3. 聴解力の実際

以上のことからまず聴解力の実際について考える。聞き取り能力と一口に言っても学習者のその他の日本語力に大きく左右されることは言うまでもない。音声は瞬間的なものであるために、簡単に言えば「知らない言葉は聞こえない」のである。読解と違って、戻ってみることも、辞書その他に頼ることもできないので、学習者がその時点で持っているものだけが頼りである。また、一般的な理解力も関係してくる。読解における理解が不十分な学習者は聞くことができたものを理解する力も弱い。また、初めて聞くものの内容に対する知識も大きく関係する。よく知っている内容は外国語で聞いてもよく分かり、知らないことは母国語で聞いてもよく分からないと言ったところだろう。そのため聴解力を高めるといっても語彙力その他の知識の部分に左右されることが大きいと言える。

しかし、聴解力が知識だけに関係しているとはもちろん言えない。耳の部分というか、一般的な聞き取りに関する生理的能力が考えられる。これには幾つかの段階を考えることができる。最初の段階はスピードについて行く段階である。無意味な音の羅列からの音のまとまりを取り出すことの出来る状態に行くことである。この段階ではたとえて言えば障子のような幕にぼつぼつ穴があいて知った音が見える状態と言ったらいだろう。

スピードに慣れてくるとその中から意味のまとまりが拾えるようになってくる。これが第二段階である。意味のまとまりと言っても単語レベルが多く、聞いた音を知った単語にこじつける誤りも多く見られる。何が聞こえたかを学習者に問うた場合単語が返ってくるのがこの段階で、

この時学習者は全体に関してはほとんど掴めていないことが多い。例にあげた台風のニュースのような場合には、「台風、南、なに地方?」といった答えが返ってくる。さらに、「何の台風?、何とか庁?、九州の東の何?」といったように聞き取れた部分から他の単語を捜し出そうとすることも多い。この第一第二段階程度では、録音の中の雑音、録音の質などに学習者の注意が行くことが多く、実際にはそれ程の問題とならないはずのものを大きな障害として受け取ることも多い。

次の段階では一文程度の長さまで聞き取れるようになる。助詞など細かい部分は聞き落とすものの、2,3の自立語を含む文が復唱できる段階と言えるだろう。ニュースの例では、「午後1時半に何か、55キロの速さで何に進んでいます」程度の答えが返ってくる。しかし、かなりわかっているように見えて実際には意味にまで理解が及んでないことが多い。杉藤美代子氏によるニュースの聞き取りにおけるポーズの果たす役割についての興味深い報告があるが(杉藤 1989, p.359), それによるとニュースからポーズを除いた音声聞いた人はニュースの内容をまとめることができないという事である。この段階の学習者の状態はこの、ニュースからポーズを除いた音声聞いた母国語話者の反応と似ているのではないか。聞いたものを反復することは出来るものの、それをまとめる時間がないため、内容を理解するに至らないのである。つまり、即時記憶に短期貯蔵された情報が記憶の長期貯蔵に移行しない状態と言えるだろう。すべての短期貯蔵された情報が長期貯蔵に行くのではなく、そこから取捨選択されるわけだが、その操作がまだ出来ない状態である。これができるようになると全体が見え、全体の意味がつかめるようになる。この段階になると、内容を質問されても細かい部分の復唱ではなく、全体の大意をつかんだ上の答えが出る。これが最終段階である。もちろん細かい部分まですべて聞くことができるというわけではなく、それ以上の聴解力の向上には語彙力が大きく関わって行くことだろう。

学習者の習熟度を見て行くと、以上のような段階を経て聴解力が上が

って行くことがわかる。実際にはこのほかに、わからない音の連続を知らない単語であると切り捨て、その知らない単語を文脈から類推する能力、次に来ることを予測する力、文脈から考えて、ありそうな音の連続を予想する力などが、具体的な聴解力向上に必要な要素として考えられる。

以上の4段階を経て、あるスピードでの、純粋な耳による聴解力について行くわけだが、聞く資料のスピードが速くなれば更に上の段階で以上の過程が繰り返される。速さに関しては、初級教材のテープのような速度から、中級教材のテープ、ラジオ番組、テレビ番組等、いろいろな速さが考えられる。そこで次に、漠然と感じる速い、遅いということ、内容の違い、それが聞き取りに関わって行く状況などについて、実際にはどうなのかを考えてみることにした。

4. ラジオ番組の教材化について

4.1. ラジオ番組について

聴解練習の教材を考える時ラジオ番組は比較的に利用し易いものだということができる。手に入りやすく、アナウンサーなど訓練を受けた話し手による資料を得ることができる。また、新聞と同じように時事性に富む点も見逃せない。これは学習者の興味を引きやすい点である。テレビを使ったビデオ教材も学習者の興味をかきたてる点はよいのだが、画像が手掛かりとなり純粋に音声に関心が行かないことと、操作しにくいなどの点で聴解教材としてはラジオ番組のテープ録音のほうがすぐれている。音声だけの聞き取りに集中できるからである。ラジオ番組を授業で使用する場合、資料の性質により、聞き易さ、難しさの質、度合が異なることに気付かされた。これは先に述べた聞き取りの質にも関係することである。本来は機器を使って厳密に発話の長さ、休止部の長さなども測定したいところであるが、今回は簡単にその特徴などを分析したいと思う。

4.2. 種々のラジオ番組の質の違い

授業で使った資料のうち、ニュース2種、ニュース解説、ニュースレ

ポート、情報提供型(航空便の発着状況)、トーク番組、(このうち特に司会者が聴衆に向かって解説を加えている部分【語り】と、ゲストが自由に話している部分【ゲスト】とを取り上げた)、野球の解説、ドラマの各1パラグラフに相当する部分を取り上げ以下の項目について調査した。なお、全体の長さは手動のストップウォッチで計測した。字数というのは、「あの」、「その」、「ま」、「ええ」などの無意味音も含め、1モーラを1字と数えた時何字分に相当するかであり、自立語の数とはいわゆる国文法上の自立語の数で、形式名詞、補助動詞は含めなかった。簡単に言えば具体的意味のある言葉ということである。また、漢字語彙等は漢字2字分程度を1語として数えた。新出語彙とは一般的に見て中級程度で与えるべき語彙の数を表す。このほか、1字(モーラ)当たりの秒数、自立語と新出語彙については何字に1語出てくるかを計算した。1字当たりの秒数は数値が小さいほど発話のスピードが速く、自立語と新出語彙については数値が小さければ小さいほど、意味のある言葉、新しい言葉が密に現れる、つまり難しいことを表す。このほかに参考として、聴解教材として開発された以下の3種のものについても調べた。

* 司会：上記教材 *Aural Comprehension Practice in Japanese* 16 課

* ニュース：『ニュースで学ぶ日本語』36 課 (男声)

* 声：『「朝日新聞の声」を聴く』1 課

ラジオ番組を1モーラ当たりの時間、1自立語当たりの数字に着目してみると幾つかの型に分類できるのがわかる。一つは、発話のスピードは速いが内容が薄く、無意味語の多い、【語り】、【解説】、【レポート】類である。1モーラ当たりの時間の多い【ゲスト】と【レポート】に関してはポーズが多いのが特徴で、発話の部分はかなりスピードが速い。司会者、解説者と異なりラジオ番組などで話すのに慣れていない話者によるものだということを考えれば、無意味語の多さの点を見ても同じ種類のものだといえることができる。これは比較的自由的な会話に近いものだといえる。また、言いさし、言い違い、省略、さらに重複もあり、スピードの変化が大きい。

表

種 別	字 数	秒 数	自立 語数	無意味 語数	新出 語数	◆	☆	◎
ニュース	213	28"36	44	1	7	133	4.8	30
語 り	152	15"14	24	10	4	099	6.3	38
ゲスト	131	16"98	25	8	3	152	5.2	24
解 説	168	19"68	32	5	7	117	5.2	24
情 報	169	19"95	38	1	7	118	4.4	24
レポート	173	26"37	25	5	3	152	6.9	34
ドラマ	208	30"89	48	0	6	148	4.3	34
*司 会	162	23"37	19	0	0	144	8.5	0
*ニュース	315	48"74	68	0	13	154	4.6	24
*声	214	35"35	44	0	5	165	4.8	42

◆ 1 モーラ当たりの時間(単位ミリセカンド)

☆ 1 自立語当たりの字数

◎ 1 新出語彙当たりの字数

割合として少ない自立語は比較的ゆっくり、複雑な文末形式は早口で言われることも多い。聞き手にとっては速い部分に目をとられると全体が分からなくなるが、緩急をのみこんで重要なところにだけ神経を集中させることができると非常に聞き易いものとなる。抽象的な名詞の割合が少なく、日常的な語が多いこともその一助となっている。このなかでも[レポート]、[解説]はその性質上、特殊な語彙が多い点が自由な語りとは少々異なる。しかし、抽象的な名詞が多いものの、難しい語彙があらかじめ与えられているという条件のもとでは、重要な部分を取り出して聞くことができれば比較的平易なものとなる。ただ、話し手が訓練された人間ではないことが、時として聞き取り難さの原因となることもある。

[情報提供]は発話のスピードは上記と近いが、内容が濃い。新出語彙が多いのは地名、特別な専門用語が多いからであり、それらの語の性質が

かめれば速さについてゆくことが問題となるだけである。形式に慣れれば、次々に単独の情報が羅列的に並べられているだけなので、短時間でも意識が集中できれば、必要な情報のみを取り出すことはそれ程難しくない。

[ニュース]は発話のスピードは比較的遅いものの、全体的に均一な印象があり、どの発話部分を取っても言葉自体のスピードにほとんど変化はない。無意味音の混入も少なく、密な印象を受ける。文は整っており、文末も無駄がない。そのため、意味のある自立語、特に大章語的な抽象名詞の割合が高い。聞き手にとっては均一で聞き易い一方、すべての語に注意を集中しなければならないと言う聞き難さをもつ。語彙が難しく、また、繰り返しが少ないため、一度聞き落とすとそれを再現したり、想像することが難しい。その結果一つの語が分からないためにそれ以下の文脈を聞き逃す危険性もある。スピードに慣れることより、語彙力に頼るところが大きい。

[ドラマ]はやはり原稿がある形のものであるが、[ニュース]とはかなり違った様相を呈する。発話のスピードは[ニュース]よりさらに遅く、内容は密である。比較的スピードが遅く、文が整い、プロの話し手によるドラマは、新出語彙が多いものの、内容、文脈によってかなりな部分補って聞くことができるようになる。ここで要求されるのはむしろ類推力、理解力であろう。聞き落とした部分をいかに補って聞くことができるかである。

以上のラジオ番組と比較すれば教材はいずれも発話のスピードがやや遅いことが分かるだろう。特に語彙がコントロールされているような場合には、初級からこの段階に行くまでの練習に用いられるべきである。

4.3. 教材として利用する

以上のものを教材に利用する際には、次のような点に注意する必要がある。ニュースはスピードが比較的速くないので、比較的理解しやすい内容のものを初期の段階で使うか、十分に語彙を与え、ある程度練習した段階でスピードに慣れさせるために利用する。ただ、かなりの緊張を伴うものであるから、最初は余り長くないほうがよいかも知れない。語彙力に頼る

ところの大きいニュースは中級の早い段階から、語彙力をつける練習にもなる上級段階まで利用範囲の広いものである。

スピードに慣れる練習には情報提供型のものが適当だろう。その中のある地名なり何かをキーとして与えてその状況のみを聞き取らせる練習はかなり早い時期から行うことができるものである。ニュース解説などは緩急の間の取り方の練習のために利用する。これも語彙を与える必要がある。ニュース、ニュース解説などのよいところは時事性に富むため学習者が興味を持って聞けるところにある。その知識を持っていることも多いので、利用したい。

最初のうちは難しいが、トーク番組も内容を選んで、普通の会話のスピード、特徴に慣れさせるために使いたいものである。テレビドラマ、映画などの会話とは違った種類の会話でもあり、また、この種の会話を聞く練習ともなるものである。

想像力、理解力、類推力と言ったものは語彙力と同じように、聴解以外の分野でも必要とされ、また、それらの分野でも訓練の出来るものである。また、ある程度聴解力が着いた段階ではそれらの力をつけないことにはそれ以上の向上は望めない。知らないことは聞けない、予想できないことは聞けないからである。

5. その他の問題点など

5.1. その他の問題点

他技能との関連としては読解力、理解力が問題となるが、その他にも、発音、アクセントがかなり大きな位置を占めることを忘れてはならない。日本人の耳にはアクセントの違いから全く問題にならないような語の違いが、時として落とし穴になることも多いからである。筆者はごく短期間に、程度も状況も違う数種の学習者が全く同じ誤りを犯したのを目にした。「～が来るまでの間」という一連の音を「車で」と理解したものである。その中にはかなり上級の学習者もいたにもかかわらずである。学習者

自身がこの二つの音の連続を同じアクセントで言っていたとしたら、それを聞き分けさせるのは至難の技である。その他、撥音、促音などの特殊音節も聞き分けにくいものである。聴解練習の前に学習者の発音練習が必要であろう。ともすれば中上級になるに従い発音練習がおろそかにされがちだが、聴解練習のためにも発音練習は欠かせないものであると言うことができる。

その他、具体的には問題の作り方、語彙の与え方も重要な問題点の一つである。問題は学習者の力を試すというより、聞くためのヒント、ポイントの置き方、注意の喚起などの目的で作られるべきであり、その意味ではどのくらいの量の語彙をどのような形で示すかということと同質の問題である。語彙も、ただリストを配るという形から使い方等事前に練習させるなどいろいろな与え方が考えられる。この問題は練習する内容、学習者の程度、質などより、大きく変化する部分でもあるだろう。

5.2. 今後の課題

今後の課題としては次のようなことが考えられる。簡単に言えば、聴解力をどのようにして客観的に測定するかということである。教師の側から見れば、学習者とのやり取りなどから大体のところはつかむことはできるが、出来れば客観的な指標とでもいえる学習者の聴解力を測るものが、さらには使った資料の質が測定できるものが欲しいところである。資料に関しては、実際の発話のスピード、休止部の長さの測定などについて、機器を用いスペクトログラフを取って厳密に計測するなどの方法が考えられる。また、無意味音の型、入り方等についても調査が可能である。以上のような方法でより客観的な分析を行ってゆきたいと思っている。

参考文献

- 木村宗男他編 1989 『日本語教授法』 桜楓社
W. M. リヴァース 1987 年 『外国語習得のスキル—その教え方(第2版)』 研究社
Brown and Yule 1983 *Teaching the spoken Language* Cambridge University Press.

杉森美代子 1989「談話におけるポーズとイントネーション」
『講座日本語と日本語教育 2 日本語の音声音韻(上)』明治書院
—— 1986「ニュースの報道における発話時間及び休止時間と発話速度」
—— 『サケ・マス』交渉の場合』『樟蔭国文学』23号
スワン彰子「聴解力について」『講座日本語教育第24分冊』
日本語教師指導参考書7『中・上級の教授法』